

**沖代地区条里跡 福成・龍田地区
中津城下町遺跡 殿町奥平孫次郎屋敷跡
中津城本丸南西石垣(II)**

2002年度 中津地区遺跡群発掘調査概報(XV)

中津市文化財調査報告 第30集

2003

中津市教育委員会

例　　言

- 一、本書は中津市教育委員会が2002年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。
- 一、調査は2002年度国宝重要文化財等保存整備事業費及び2002年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。
- 一、調査団の構成は下記のとおりである。

一、調査主体　中津市教育委員会
調査責任者　武吉　勝也（中津市教育委員会教育長）
調査事務　尾畠　豊彦（中津市教育委員会市民文化センター課長）
　　　　　　田中布由彦（　　　　　同　　　　　係長）
　　　　　　富田　修司（　　　　　同　　　　　主査）
調査員　渋谷　忠章（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）
　　　　　　吉永　浩（　　　　　同　　　　　主幹兼文化財管理係長）
　　　　　　小林　昭彦（　　　　　同　　　　　主幹兼埋蔵文化財係長）
　　　　　　原田　昭一（　　　　　同　　　　　副主幹）
調査担当　高崎　章子（中津市教育委員会市民文化センター主査）
　　　　　　花崎　徹（　　　　　同　　　　　主任）

上記の他、磯村幸男氏（文化庁記念物課主任調査官）、木中眞氏（同主任調査官）、坂井秀弥氏（同調査官）、北垣聰一郎氏（元東大阪短期大学教授）、高瀬哲郎氏（佐賀県立名護屋城博物館学芸課長）、後藤宗俊氏（別府大学文学部教授）、豊田寛三氏（大分大学教育福祉科学部教授）、梅崎恵司氏（北九州市芸術文化振興財團埋蔵文化財調査室学芸員）他多数の方々より御指導をいただいた。厚く御礼申し上げます。

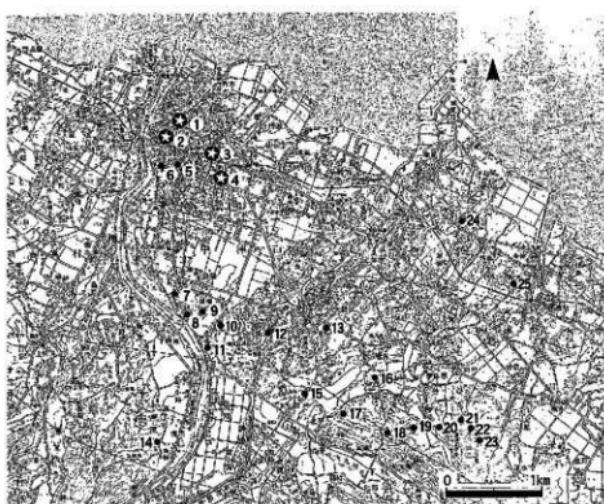
- 一、本書の執筆、編集、製図、写真撮影は第1章、2章、3章を花崎が、第4章を高崎が行い、中野温子、金丸孝子（中津市歴史民俗資料館）の協力を得た。
- 一、第4章　中津城本丸南西石垣（II）の第4図石垣断面図は浦畑一久氏に作成していた
だいたい。
- 一、現場作業は下記の皆さんの協力による。

植山ヨシカ、植山京子、松木　勲、黒川洋美、若木和美、遠水善郎、岡田由美恵、上川幸枝、塩谷絹子、松村たか子、松永理恵、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、猪立山順子、清永洋美、山縣信夫、田原文子、石塔美代子、瀬川礼子、中村香代子、田中トミ子、中村恵美子、阿部恵子、川口政代、有富嘉子、江藤清子、中島祐子（順不同）

目 次

第1章 地理と歴史的環境	1
第2章 沖代地区条里跡	
1. これまでの調査	2
2. 福成地区	
(1) 調査に至る経緯と調査内容	3
3. 龍田地区	
(1) 調査に至る経緯と概要	4
(2) 遺構	4
(3) 遺物	4
(4) 小結	6
第3章 中津城下町遺跡 殿町奥平孫次郎屋敷跡	
1. これまでの調査と調査に至る経緯	7
2. 調査の概要	8
3. 土 壤	9
4. 石 列	9
5. 小 結	10
第4章 中津城本丸南西石垣 (II)	
1. 調査に至る経緯	11
2. 中津城の石垣	12
3. 13年度、14年度調査の概要	13
4. 本丸南西石垣10区調査区	13
5. 大鳥居西調査区	18
6. 椎ノ木門南調査区	19
7. まとめ	21
図版1	23
図版2	24

第1章 地理と歴史的環境



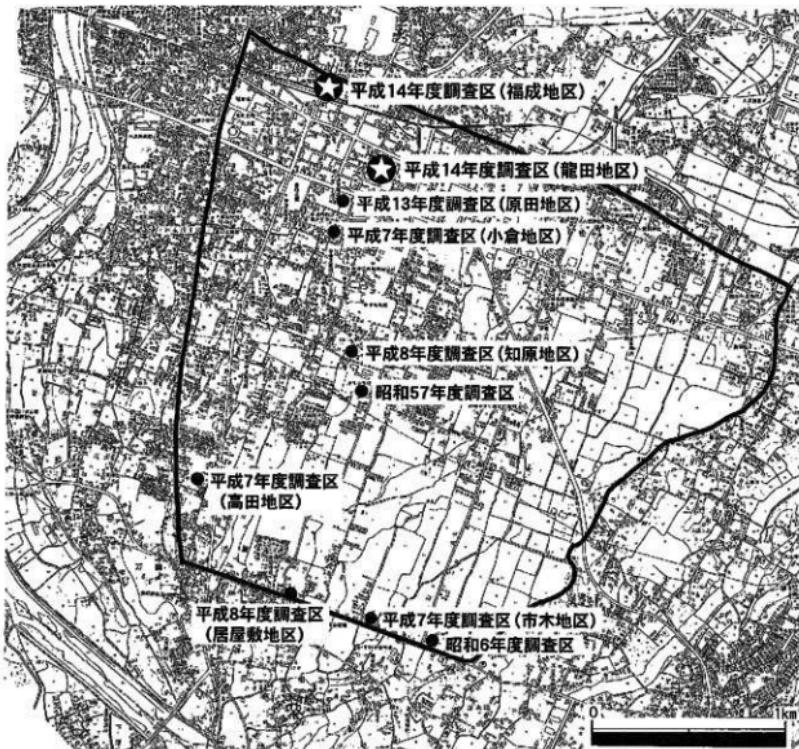
第1図 中津地方遺跡分布図

1. 中津城
2. 中津城下町遺跡
鹿町東平原次郎原遺跡
3. 沖代地区条里跡
福成地区
4. 沖代地区条里跡
船出地区
5. 豊田小学校
6. 高畠遺跡
7. 上万田遺跡
8. 三口遺跡
9. 相原夷寺
10. 相原山西遺跡
11. 狩魔跡古墳
12. 長者屋敷遺跡
13. 鹿神社
14. 百留横穴墓群
15. 大坪遺跡
16. 福島遺跡
17. 森山遺跡
18. 洞ノ上遺跡
19. 才木遺跡
20. 伊藤田城山古跡
21. 夜鳴塚跡
22. 跡の追跡
23. 小ヤ池塚跡
24. 定置遺跡
25. 赤追遺跡

中津市は大分県の北部、人口約67,000人、市域面積55.67km²を有する。地形は平坦なもので、平野(沖積平野)と台地(洪積台地)とに大別される。西は山国川を挟み福岡県へ、東は宇佐市へ台地が延びる。

ここで中津地方の主要遺跡を概観する。縄文時代の遺跡は高畠遺跡、棒垣遺跡、入堀貝塚などがあげられる。いずれも縄文時代後期に属する。弥生時代の遺跡は福島遺跡、森山遺跡などがあげられる。福島遺跡では台地上で溝状の造構が160m程確認され、大規模な集落が予想される。古墳時代の遺跡の集落は台地上や平野部に分布する。丘陵上には野依伊藤山古跡群が立地し、須恵器や須恵質瓦の生産が認められる。律令時代の遺跡は沖代平野に条里制がしかれる。台地には下毛郡衙と推定される長者屋敷遺跡が立地する。条里跡は現在もその景観を残す。中世の遺跡は諸田遺跡、大丸川流域遺跡群などがあげられる。中世城館は中津市内に点在する。1587年、秀吉の九州征伐に伴い黒田孝高が豈前に入国し、中津城を築城する。1600年以降、細川、小笠原時代に城下町が形成される。

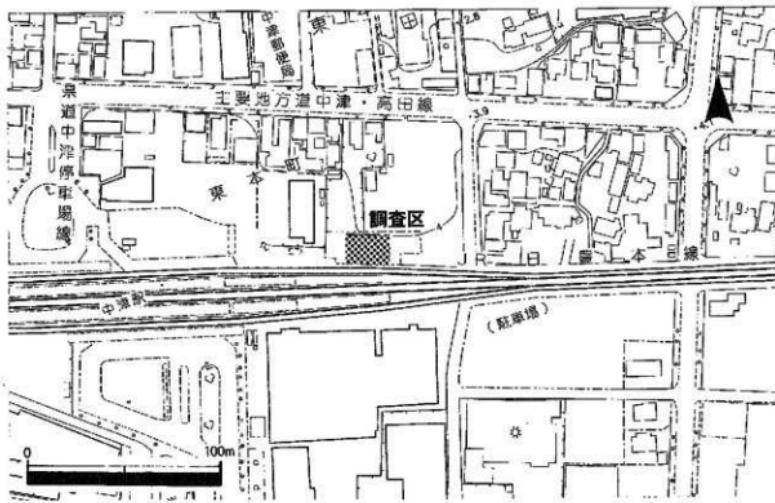
第2章 沖代地区条里跡



第2図 沖代地区条里跡周辺図

1. これまでの調査

中津市の中央部、沖代平野には古代に施行された条里的地割がひろがる。この地割りは現在も水田として利用され、方形の区画が残る。しかし近年の開発によりその景観は失われつつある。そこで中津市教育委員会では平成7年度より国庫補助を受け緊急の民間開発に伴い調査を行ってきた。ここでこれまでの主な調査を概観する。平成7年度は条里的最南端と推定される市木地区的調査を行った。水田に係わる溝や、水田祭祀と考えられる遺物を検出した。また稻株と思われる黒色で直徑5cmほどの小円孔が密集して確認された。平成8年度知原地区と居屋敷地区的調査が行われた。居屋敷地区では古墳時代の竪穴住居、溝などが検出された。市木地区的水田と居屋敷地区的住居跡はセットとしてとらえられるものと推測された。平成13年調査区、原田地区では近世の溝、畦などが検出された。また畦を境に市木地区と同様に思われる小円孔が確認された。



第3図 沖代地区条里跡 福成地区周辺図

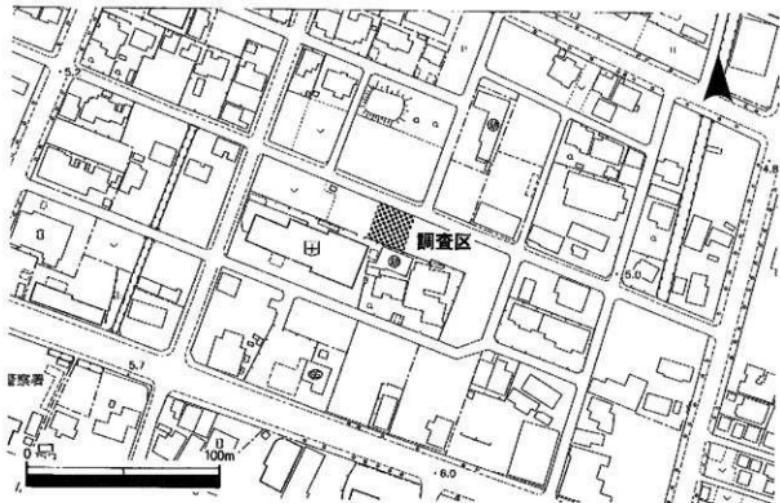
2. 福成地区

(1) 調査に至る経緯と調査内容

福成地区周辺では県道拡幅に伴う発掘調査が実施されている。近世の溝が検出された。また龍谷高校校舎立替に伴う試掘調査が実施された。遺構、遺物とも検出されなかった。県道は条里の最北端と推定され溝はこれに関連するものと考えられた。今年度、民間開発に伴い緊急の試掘調査が福成地区で実施されることとなった。調査区はJR中津駅の北東側にあたり、旧国鉄の時代、貨物電車の引き込み線として利用されていた。重機によりトレーナーの掘削を行った。トレーナーは幅約3m、長さ約15mである。表上より1.5mほど掘り下げたが遺構、遺物とも検出されなかった。一部2mほど掘り下げたが同じ状況であった。調査区は近代の開発により遺跡の存在は皆無と判断し、埋め戻して調査を終了した。



写真1 沖代地区条里跡福成地区トレーナー状況



第4図 沖代地区条里跡 龍田地区周辺図

3. 龍田地区

(1) 調査に至る経緯と概要

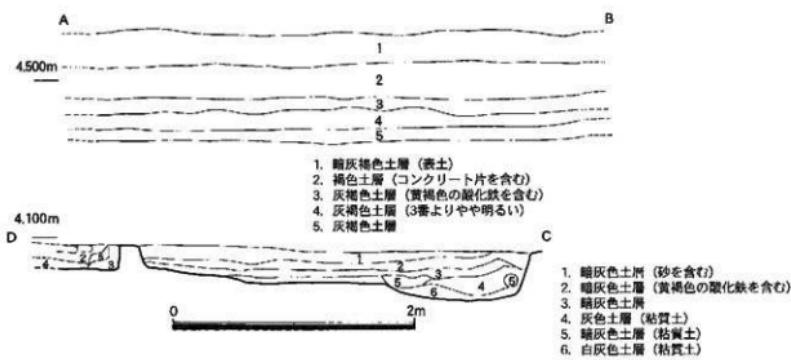
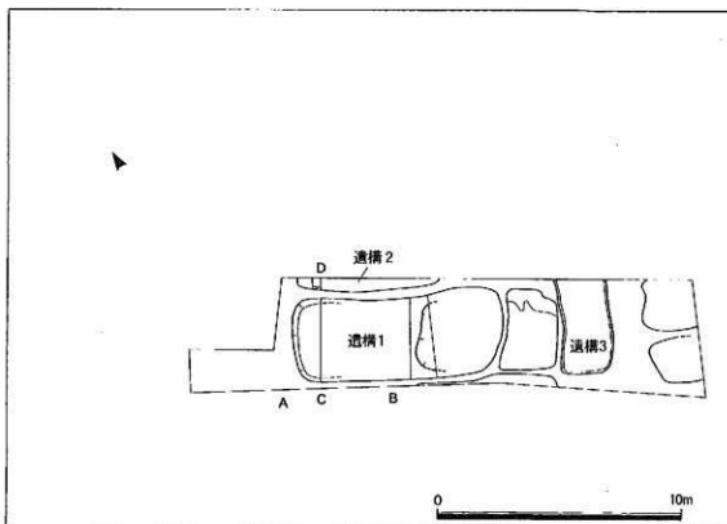
龍田地区も民間開発により緊急の試掘調査が実施されることとなった。幅約5m、長さ約20mのトレンチを建物が建設される場所に設定し、重機により掘削を行った。表土より90cmほど掘り下げ灰褐色の地山に達した。表上から地山まで灰色や黄褐色の酸化鉄と思われる層が観察された。トレンチを拡張していくと暗灰色の方形の遺構を検出した。検出した遺構は全容が明らかでないものを持め7基、確認された。方形の遺構は幅約10cmの地山を挟み区画されるように検出された。

(2) 遺構

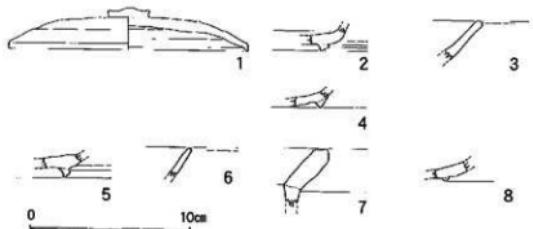
方形に区画された遺構を一部掘り下げ調査を行った。遺構1の西側と遺構2の西側を掘り下げた。遺構1、2とも掘り下げた断面から暗灰色の泥土と黄褐色の酸化鉄と思われる土層が観察された。また遺構の底では灰色の砂質土が堆積していた。遺構3は検出された部分を全掘した。1:の堆積状況は遺構1、2と同様であった。

(3) 遺物

掘り下げた遺構1、2、3から小片であるが古代から近世に亘る遺物を検出した。また重機で掘削の際遺構検出面上層より遺物を検出した。1は遺構検出面上層(5図5層)より検出した。須恵器の坏蓋である。復元口径は15cm、器高2.6cmである。口縁端部は丸みをもち、やや外反する。2～4は遺構1から検出されたものである。2は須恵器の坏の底部になると思われる。内外面とも回



第5図 沖代地区条里跡 龍田地区遺構図・土層図



第6図 沖代地区条里跡 龍田地区出土遺物

転ナデを施す。3は瓦器碗の口縁部になるとと思われる。端部はわずかに外反し丸みをもつ。4は瓦器碗の底部になると思われる。高台は断面逆三角形を呈す。5～8は遺構3の出土遺物である。5は須恵器の壺の底部か。6は瓦器碗の口縁部になるとと思われる。内面にミガキを施す。7は上質土器の口縁部。8は瓦器碗の底部か。高台は断面逆三角形を呈す。

(4) 小 結

今回の調査区で検出した方形の遺構群は水田になると考えられる。水田の中で検出された遺物は古代～近世に至るものである。いずれも小片で10数点である。時代を特定するにいたらないが若干中世の遺物が多く検出される。水田は個々に区画される。調査区の西側と東側では10cmの標高差が生じる。水利は西から東へ流れ込むようになっていたものであろうか。今回の開発は表土より40cmほどで、地下に影響はなく遺構は保存できることから、本調査に至らなかった。水田遺構を検出できたことは大きな成果であった。

〔参考文献〕

『沖代地区条里跡 福島遺跡東人垣地区』中津地区遺跡群発掘調査概報（VII）

中津市教育委員会 1996

『沖代地区条里跡（II） 福島遺跡東人垣地区（II）』中津地区遺跡群発掘調査概報（IX）

中津市教育委員会 1997

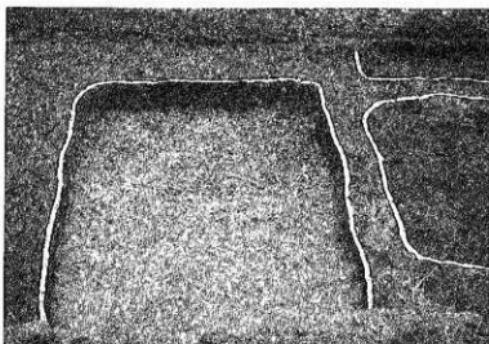


写真2
沖代地区条里跡 龍田地区 遺構3

第3章 中津城下町遺跡 殿町奥平孫次郎屋敷跡

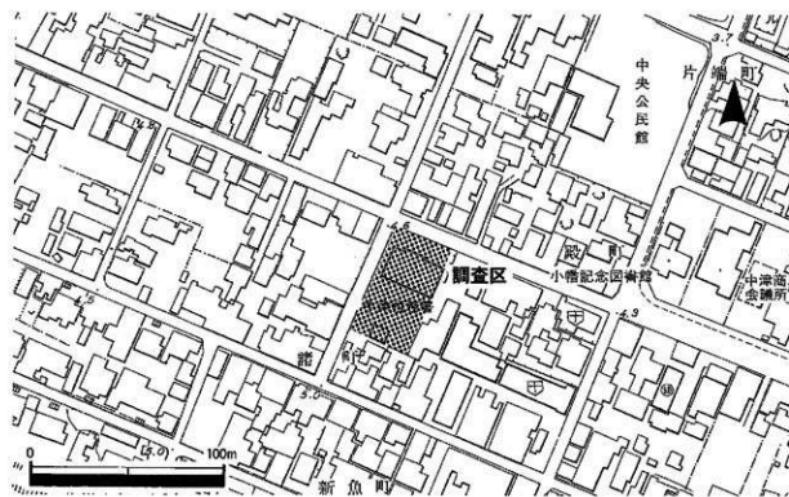


第7図 中津城下町遺跡周辺図

1. これまでの調査と調査に至る経緯

1632年播磨国龍野から小笠原長次が八万石の城主として入部した。「豊前誌」によれば小笠原時代に中津の城下の整備が完成されたとされる。1588年、黒田孝高により中津城が築城されてから60数年を経て中津の城下町の原型はほぼ完成された。現在、城下14町は中津城下町遺跡として周知される。これまでに中津城下町遺跡では9地点の試掘調査、本調査が実施されている。

ここで主な調査を概観する。昭和63年度、マンション建設に際、内堀に伴う土塁が調査された。



第8図 中津城下町遺跡殿町周辺図

土塁、通称「おかこい山」では、土塁を堅固にするための大量の河原石、これを覆うように土盛りをした土塁の状況が観察された。また土塁へのぼるための坂道状の造構が検出された。平成3年度、中津市立図書館が建設される際、発掘調査が実施された。寛政の改革後、全国で藩校が急増した。調査区内には中津藩の藩校進脩館跡が期待されたが、近代の開発により礎石と溝状の造構を検出したのみであった。平成6年度には中津市の南部地区公民館建設に伴う発掘調査が実施された。調査区では大手門につながる石垣や土壙、建物跡、石列などが検出された。石垣は保存され現在、造構表示がなされている。平成9年度～11年度、県道拡幅に伴う発掘調査が実施された。調査区は絵図によると旧武家屋敷跡が立ち並ぶ地点であった。調査区内では土壙、井戸、屋敷の境界線を示す造構などが検出され、大量の遺物が出土した。

今年度、中津城下町遺跡内で緊急の民間開発が行われることとなり、試掘調査を実施することとなった。調査区は平成9年度～11年度に実施された県道に隣接することから武家屋敷に作る造構、遺物の存在が予想された。なお、調査区は幕末の絵図から奥平孫次郎の屋敷跡と位置が重なることから、殿町、奥平孫次郎屋敷跡とした。

2. 調査の概要

調査区に5本のトレレンチを設定し重機により掘削を行った。1トレレンチは表上より10cmほどで灰色のブロック状の塊を検出した。2トレレンチは表上より1mほど掘削し黄褐色の整地層に達した。

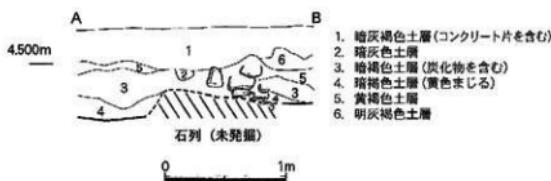
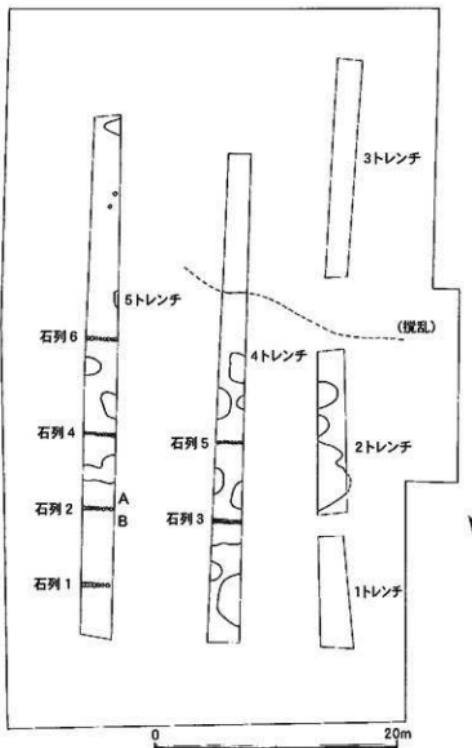
この層より3基の土壌と推測される遺構を検出した。3トレンチは表土より2mほど掘り下がたが搅乱が著しく地山に達しなかった。4トレンチは2トレンチと同様1mほどで整地層に達し南側で土壌、石列を検出した。北側は3トレンチと同じ状況であった。5トレンチは4トレンチと同じ状況で、南側で遺構を検出した。

3. 土 壤

今回の試掘調査で土壌は1基も掘り下げていない。しかし重機で掘削の際、出土した遺物は18世紀～19世紀代の陶磁器が検出される。県道拡幅調査時の状況と同様に、土壌群が調査区南側に広がるものと推測される。

4. 石 列

石列は建物跡の基礎になるものであろう。表土より30cmほどで石列の河原石が確認できた。9図は平板測量によるものである。石列2と石列3、石列4と石列5は直線に並び並行する。また石列1と石列6もこれに平行に並ぶ。河原石の頂上部にコンクリートが貼り付けられることから近代の建物跡と判断した。



第9図 中津城下町遺跡
殿町奥平孫次郎屋敷跡遺構図、土層図

5. 小 結

調査区内には平成12年度まで税務署が建っていた。税務署は解体され移設された。調査区の北側、調査区の約半分はこの開発により皆無の状況であった。南側は駐車場として利用されていたため地下への影響はなく、遺構が検出された。石列は周辺の聞き取りから醤油が製造された建物が昭和初期に存在していたことが確認され、これに伴うものであろう。土塙は江戸時代のものと判断し、開発業者と協議したが建設の変更には及ばず、本調査が行われることとなった。本調査では武家屋敷の一部が検出されることが期待される。

〔参考文献〕

- 『おかしい山』 中津城内堀上塁遺構の調査 中津市教育委員会 1990
『藩校進脩館跡 相原廃寺IV 中原遺跡』 中津地区遺跡群発掘調査概報(IV) 中津市教育委員会 1992
『中津城下町遺跡 京町 御用屋敷跡』 中津市教育委員会 1998
『大分県文化財年報7』 平成9年度版 (中津城下町遺跡) 大分県教育委員会 1999

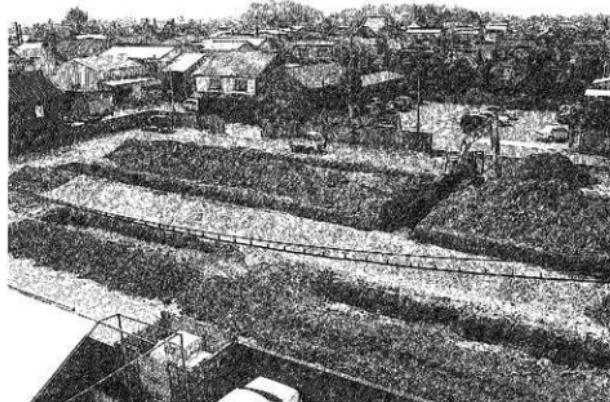


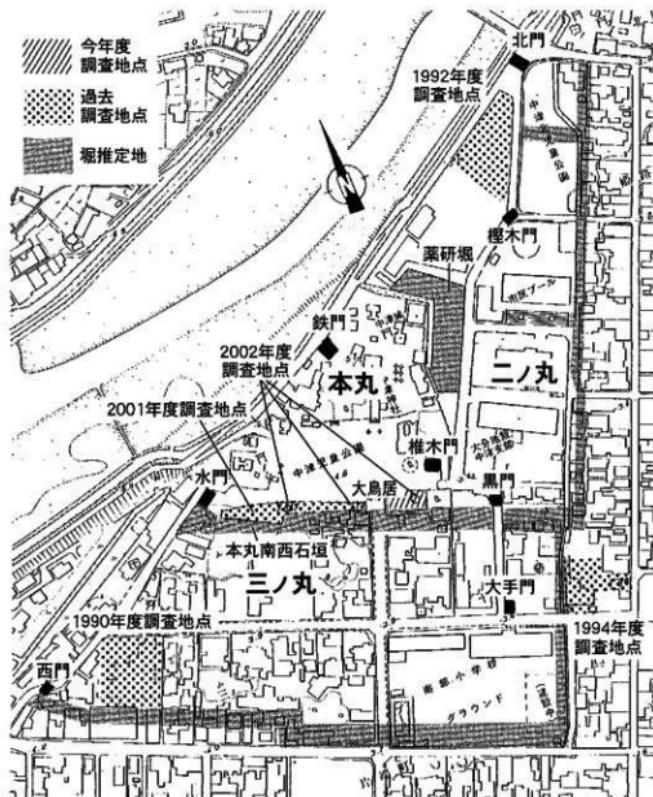
写真3 中津城下町遺跡駅町 奥平孫次郎屋敷跡 トレンチ状況

第4章 中津城本丸南西石垣（II）

1. 調査に至る経緯

中津市では、2000年4月、国土交通省「まちづくり総合支援事業」の一環として、中津城本丸と三の丸の間の堀と石垣の整備に着手することになった。事業主体は中津市都市計画課である。2000年11月～2001年3月に実施設計、2001年11月復元工事がスタートした。今回の工事は道路西側の石垣を修復し、東側の破壊された上半分の石垣を復元し、堀をほりあげ水を溜め、昔の姿に近づけようとするもので、平成16年度完工予定である。

工事は堀に面した右垣の解体、復元であり、工事の影響をうけるのは奥行き1.5~2mの裏込め部分だけである。石垣解体に伴い文化財係では中津市の単費で、石の積み方や裏込めの状態などの調



第1図 中津城本丸付近地形図 (1/3500)

査を行った。さらに、これを機会に、工事の影響を受けない部分ではあるが、石垣の天端や裏側に発掘調査のトレーナーを設定し、国庫補助事業で確認調査を行うこととした。

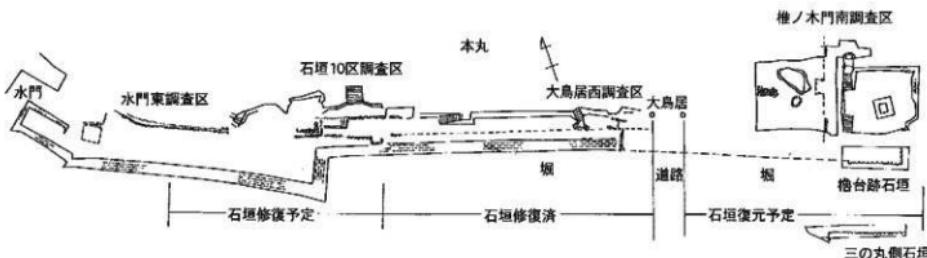
2. 中津城の石垣

中津城は1587(天正15)年、豊臣秀吉の九州平定に伴い、豊前国下毛郡など六郡の領主として人國した黒田孝高が翌1588年築城した、九州最古の近世城郭の一つである。黒田氏はじめ、大塚山の砦を修築して根拠地としていたが、天正16年、中津守太郎の居城であった丸山城を修築し、現中津城を築いた。当時の建物は残存しておらず、昭和39年に建てられた観光用の五層の復興天守があるのみである。城内は神社地になっている。堀は大半が埋められ、現在は本丸北東の薬研堀のみが水をたたえる。石垣は薬研堀に接する部分が大幅に近代の修復を受けている他は、比較的よく旧状を留める。

工事対象の本丸南西石垣は、現況では大鳥居から西に約140m程が見えるが、本来は大鳥居東側の黒門までのびる総延長約200mの石垣であった。大鳥居をくぐり城内に入る道路は明治期に石垣を壊して通したものである。大鳥居から東側は戦後石垣の上半分が破壊されたが、地下には下半分が残存する。

平成13年度に本丸南西石垣の解体修復作業が始まった。石材は花崗岩で、ごく一部、川石が使用されていた。花崗岩は中津では採取されず、山田川をはさんだ対岸の福岡県側から搬送されたものである。石は全て未加工の自然石で、いわゆる布目崩しの野面積みである。高さ約6.7m、法長約7.8m。緩やかな輪取りを施す。また石垣に反りはなく、入り角部分の勾配は約59度。大鳥居へむけて直線的に倒れ、石垣の中ほどにあたる大鳥居西側では、最も内側に傾いて約52度の勾配となる。輪取りと同じく、力を内側に集中させ、前面に崩壊しにくい構造になっている。

今回の工事では保存状態の良い下半分はさわらずに傷んだ部分のみを解体し、復元した。解体時、石一つ一つの法量を計測したところ、下の石ほど控えが長くなる傾向があった。控えの短い石が下方に集中する部分は後世に積みかえられた場所である。裏込めは石垣の面から奥行き約1.5~2mで、丸い川石を使用していた。



第2図 本丸南西石垣現況図 (1/1000)

3. 13年度、14年度調査の概要

平成13年度調査の結果、旧天端高は現在の天端より約1m低かったことが判明した。また石垣城内側の構造は、入り角部より大鳥居側は石垣、水門側は土手状であったことが確認された。この差は時期差に起因するものと思われる。また堀側の石垣を根石まで掘り下げてみたところ、石積みの方法から、天正期の築城当初の特徴を留めている様子が観察できた。

平成14年度は引き続き本丸南西石垣の天端を掘り下げたところ、城内側より約6m内側に、城内をむいた石垣が検出された。堀石垣の裏側にあたるもので、その石垣は大鳥居西側調査区の断面でも確認することができた。石垣内側の本丸内では、椎ノ木門南調査区で、大型礎石とそれに伴う石列や柱穴といった建物遺構を検出することができた。

4. 本丸南西石垣10区調査区

平成13年度調査では、忠魂碑に上るコンクリートの階段を撤去したところ、1.8m内側から花崗岩の石垣（Ⅲ期石垣）が姿を現し、その石垣天端に登る階段（Ⅲ期）も検出された。

Ⅲ期石垣の4.15m内側より、城内側を向いた花崗岩の石垣（Ⅰ期石垣）が検出された。Ⅰ期石垣には縦目地、横目地が通る部分があり、その部分の石を取り外してみると、Ⅰ期階段が姿をあらわした（写真1、2）。Ⅰ期階段の幅は約1.2m、一段の高さ約30cmで、正面から三段上がり、左に折れて二段ある。正面の三段は、一番下が横長の一石からなり、二段目、三段目は二石で構成される。左に折れた二段は一石からなる。階段を上りきったところで旧石垣（Ⅰ、Ⅱ期）の天端となる。

10区調査区では、城内側の石垣が数回にわたって改築されていく様が観察できる。まず階段の造られたⅠ期がある。Ⅰ期石垣は堀石垣との距離が短く、旧天端幅は約

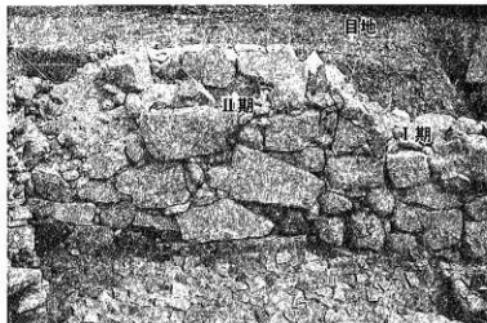


写真1 II期石垣（北→南）



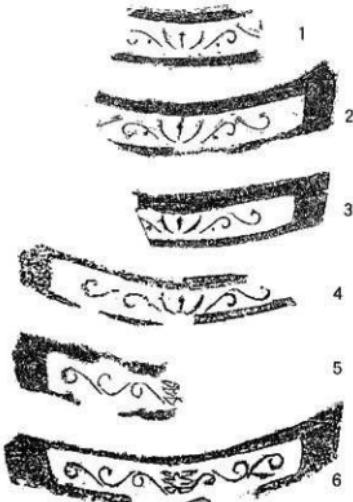
写真2 I期階段（北→南）

2.4m、天端高は標高約5.85mで、現在の高さより約1.2m低い。Ⅱ期には、階段を石積みで丁寧にふさいでいる。Ⅰ期の石垣をそのまま牛かしておらず、あまり時期差はないと思われる。

石垣前面の床面には遺物が散乱していた。掘った範囲が狭いため、量的には少ないが、三葉文の平瓦当（第3図1）の他、いわゆる京都系土器が数点、唐津の皿や、李朝の白磁碗なども出土した。遺物の年代は17世

紀前半までにおさまるもので、二期目の石垣がそのころまでに廃絶したと推測される。石垣外面では通常遺物はあまり出土しないが、この地点だけは異例で、瓦以外の遺物の集中が見られた。何らかの施設が設置されていたのではないか。

また、Ⅰ期階段一段目の前面には破碎した瓦が重なりあうことなく敷き詰められていた。瓦敷きは階段の前ののみ確認されており、Ⅰ期階段を意識したものと思われるが、瓦敷きの下には炭の層があり、一度火災にあったのち、瓦を敷き詰めていることがわかったため、Ⅰ期に属するものかⅡ期に属するものか断定しがたい。



第3図 中津城・小倉・名護屋城出土瓦 (1/4)

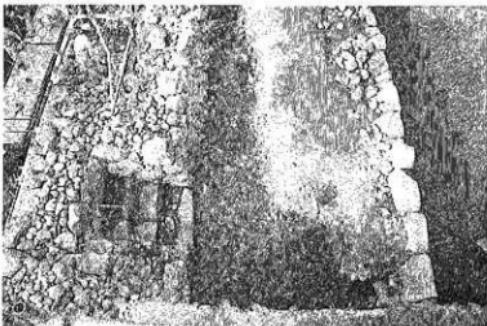


写真3 Ⅰ期石垣と瓦敷き（東→西）

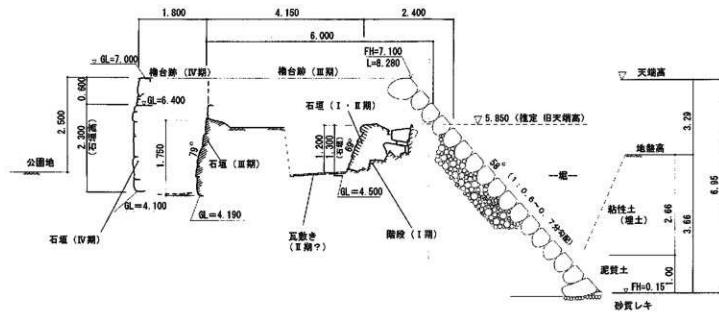
瓦は大半が平瓦であるが、一部丸瓦当、平瓦当、桐葉紋の鬼瓦片等があり、模様面は上をむいていた。平瓦当は文様帶の厚さ2.2cm、幅約20cm、三葉文の中心飾りに唐草が二つずつ左右に広がる。第一唐草の下には左右一つずつ点珠が彫られている。Ⅰ期石垣前面で検出した第3図1の瓦当と同様である。大島居西調査区でもⅠ期石垣前面より同様の平瓦当（第3図2）が出土している（本書「5. 大島居西調査区」参照）。

これらと同様の平瓦当が、平成6年に大手門前の御用瓦敷跡（註1）を発掘した際にも出土した。また小倉の京町遺跡、永照寺現存本堂基壇（第3図3）からも出土している（註2）。第3図4の資料は、1591年、黒田孝高が繩張りをし築城した肥前名護屋城の三の丸跡出土のものである（註3）。厚さ2.2cm、幅20.3cm

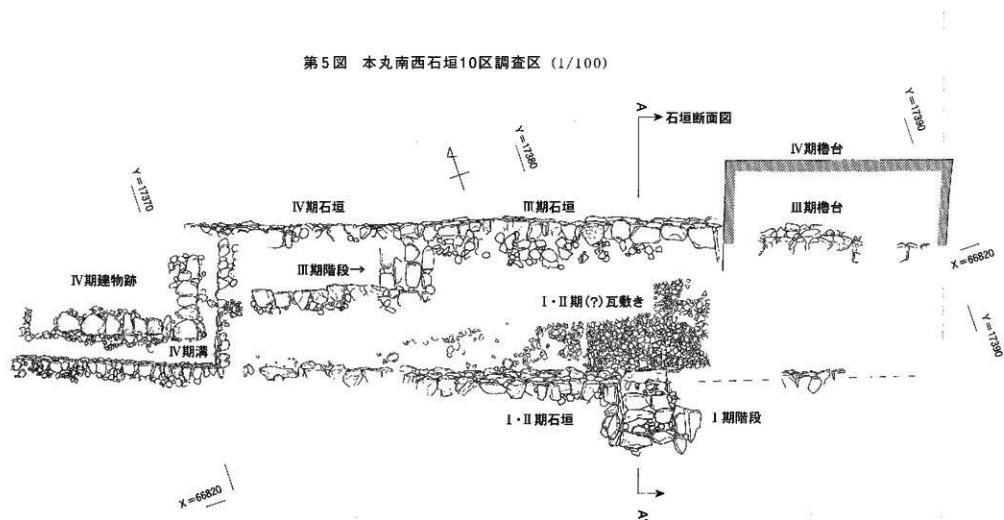


写真4 III期・IV期塀台（西→東）

第4図 石垣断面図 A-A' (1/100)



第5図 本丸南西石垣10区調査区 (1/100)



で、第3図1、2、3の資料と酷似しているが、こちらには左右の点珠がない。しかし、中心飾りの左上に外側にわずかな突起が認められ、版木のサイズ等が上記の二点の遺物と共通している。また、御用屋敷跡からは、17世紀前葉の廐棗土坑から第3図5の平瓦当が出土した。これは名護屋城天守台、本丸大手口、本丸多聞櫓、三ノ丸曲輪、山里口等から出土したものと同范であることが、現物の突合せで確認できている（註4）。名護屋城と共に存する二種類の平瓦当の存在は、小倉とあわせて版木の移動や文禄慶長の役の兵請割りなど、検討すべき多くの問題を抱えている。

瓦敷きの東側には櫓台の石積みがある（第4・5図）。櫓台跡の石積みは現在の天端高まであり、堀石垣がかさ上げされて後、堀石垣の裏込め上にのせかけるようにつみあげられている。また、堀石垣に直行する面は、上半分は石垣、下半分は石がなく土が露出する。つ

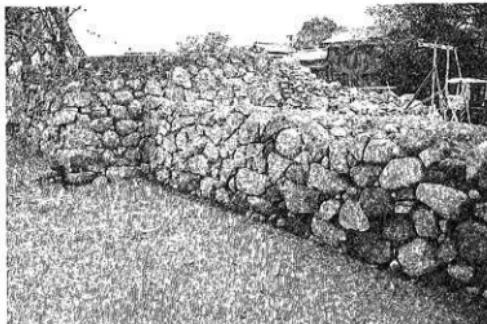


写真5 III期石垣、IV期櫓台（北→南）

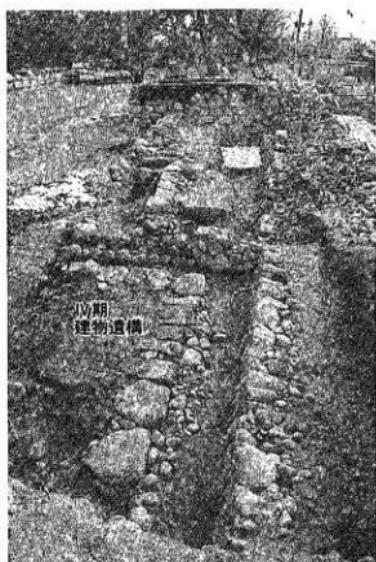


写真6 10区調査区（西→東）

まり櫓台が機能していた時には、I期石垣の前面はパックされ、城内側へ拡幅され、櫓台の上面は隠されていたことがわかる。III期石垣は櫓台跡の石垣とかみあっておらず、櫓台が造られたのちに、石垣がつまされている。また、櫓台内部から、I期石垣の延長が確認されており、I期、II期の段階ではこの場所に櫓台は造られていなかったことが判明した。

I期、II期とIII期の間に、石垣は大きく作り変えられている。細川氏が黒田氏の後中津城に入るのが1600年である。1603年、細川忠興は中津城の改修工事に着手し、1607年、三の丸完成。1620年、本丸、二の丸、三の丸、八門、二二の櫓が調えられ、整備は完成した。1632年、小笠原長次入城。1652年、中津城の整備はほぼ終わる。寛文3（1663）年の絵図にはすでに石垣上に櫓が描かれている。III期に櫓台が新設されたのは、この1620年ごろか、おそらくとも1652年まである。

Ⅲ期の段階で堀石垣が現在の天端高までかさ上げされており、檜台もその高さまであるのであるが、Ⅰ期石垣を塞いでいるⅢ期石垣は、Ⅰ期石垣までの天端高しかない。しかし、檜台跡Ⅲ期石垣の石のあわせをみると明らかにⅢ期石垣は檜台よりも後から積まれている上、檜台の石積みの下半分には石ではなく、檜台とⅢ期石垣は同時期と考えざるをえない。しかしその場合、Ⅱ期の天端の状態が問題になる。堀石垣は標高7m、Ⅲ期石垣は標高5.85mだからである。石垣天端がフラットではなく、堀石垣だけが高く、城内側が低い石垣となるのか疑問であるが、現段階ではそれ以上考えられない。

Ⅳ期、檜台はさらに城内側へ1.8m拡張される。拡張部分の石垣には丸みのある川原石がかなり使用されている。Ⅲ期の階段は直径約30~40cmの川原石でふさがれる。Ⅲ期階段の西側には、花崗岩の基礎石を並べた建物遺構が検出された。建物の基礎石は赤く比熱しているが、石上面に横一直線に幅10~20cmほど赤変していない部分がたどれる。建物の横木があった場所であろう。建物の床面も比熱していた。床面の上は、固い粘土で、炭も多量に出土した。基礎石は一段のみで、石の下には小さな川石が根固めに敷かれていた。建物跡を取り囲むように幅50cmの間隔をあけて周囲に川石の石積みがめぐり、建物に伴う溝を形成していた。建物基礎の西と北はカットされており、建物規模は不明。床面は、Ⅲ期の石垣天端よりやや低い。

絵図をみると、ほぼこの位置に、城内へかけて石垣に直行する横長の建物が描かれている。栗木門につながる建物で、それに該当する遺構ではないか。比熱の状態から現位置のまま消失したようである。火災の年代は不明。

註1：中津市文化財調査報告第21集「中津城下町遺跡 京町 御用屋敷跡」

中津市教育委員会 1998

註2：佐藤浩司「小倉城下町・寺院の軒平瓦」研究紀要第13号

(財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1999

註3：後藤宏爾「名護屋城跡出土の軒平瓦」研究紀要第2集 佐賀県立名護屋城博物館 1996

註4：名護屋城博物館の高瀬哲郎氏、宮崎博司氏のご教示による。

5. 大鳥居西調査区

大鳥居西側の石垣は、道路側が庭石風に大きく造りかえられていた。道路部分も元々は石垣であるが、道路はそのまま残すこととなり、石垣の道路側は斜めに傾斜をつけて仕上げることとなった。庭石風の石をはずし、石垣を解体していくと、排水溝の蓋石が顔をのぞかせた。当初、石垣の裏込め範囲のみ解体予定であったが、予定を変更し、城内側まで通して石垣土壁の断面をみるとこととした。すると中から、堀石垣の裏側である、城内をむいた石垣が検出された。

最も壇に近い石垣は、石の形状、積み方、堀石垣との距離より、10区調査区より検出されたⅠ期石垣につながるものである。Ⅰ期石垣の前面では名護屋城と共通する平瓦当が出土したが、ここでも、石垣の前面をふさぐ上から、同様の平瓦当（第3図2）が出土した。この石垣が10区でいうⅠ期、Ⅱ期の石垣であり、最も古い天正期のものと考えられる。

Ⅰ期石垣には、排水溝が設置されていた。排水溝には扁平な花崗岩の蓋石が並べられ、暗渠とな



写真7 大鳥居西調査区（東→西）

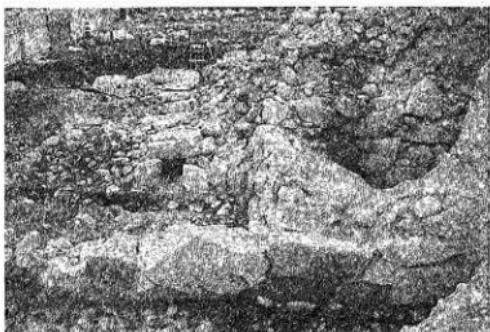


写真8 排水溝入り口（北→南）

り、堀へと傾斜する。排水溝の入口は袖石を配し、平瓦がしかれていた。城内の水を堀へと排水する機能を有しており、堀側には四角い出口が顔をのぞかせていた。山口の蓋石にはひびが入っており、解体の際割れたため、排水溝の中の空洞に石をつめて持たせることにした。その際、堀石垣の石と区別するため、小さめの川石をつめて、四角い空間を目立たせた。

I期石垣はその後、前面に石垣（III期）をとりつけられ、覆われる。排水溝入口をよけるようにL字型に城内側に張り出しており、暗渠排水は相変わらず生かしていたことが伺える。III期石垣の北面コーナー部には四角く整形された石が使用されており、再利用と考えられる。III期石垣は勾配が直線的であることから、櫓台のような施設がとりつけられたと思われる。

さらに、III期石垣の東側には

二つの石が並べられ、排水溝の入口を塞ぐ（IV期）。この二石は控えが短い扁平な石で、上につむには安定性にかける。石垣としては他と様相が異なる。その後、さらに城内側に拡張され、現在の幅になる。現在の城内側の石垣下からは古い石が横一列に並んでいるのが確認されているが、上面がそろうことから、石垣の名残というより、土壘の土留め状の石と考えられる。ここの延長である大鳥居東側の石垣が、戦後上半分が破壊される以前の姿を知っている古老の話では、城内側は石垣ではなく、土壘状だったという。最終段階、堀石垣の城内側には石垣は築かれていなかったのだろうか。

6. 椎ノ木門南調査区

昨年度、本丸南西石垣の堀の水を循環させるため、水をたたえる薺畠堀から地下3mの深さでパイプをつなぐ工事をした。その際、椎ノ木門南側のトレンチで、地下1mから、直径約1.6m、厚さ約0.7mの大型の礎石が出土した（写真9）。礎石は、径10～20cmほどの川石を根固めにためた径



写真9 椎ノ木門南調査区礎石（北→南）

2.2mの穴に据えられていた。礎石の上からは一辺26cm、厚さ3cmの正方形の塊が多量に出土した。礎石のまわりには川石を並べた側溝状遺構が確認された。今年度、礎石の性格をつかむため、トレンチを拡張し、調査区を設定した。

調査の結果、新たな礎石は検出できなかったが、礎石に伴うと思われる石列を確認できた（第6図）。石列は先の礎石の西側に、南北にのびる。一石ずつ並んでおり、右の面は西をむく。

途中一箇所西側に四角い張り出し部がみられる。石列の東側は石列の高さに一段高くなっている。地盤を硬く整地していた。

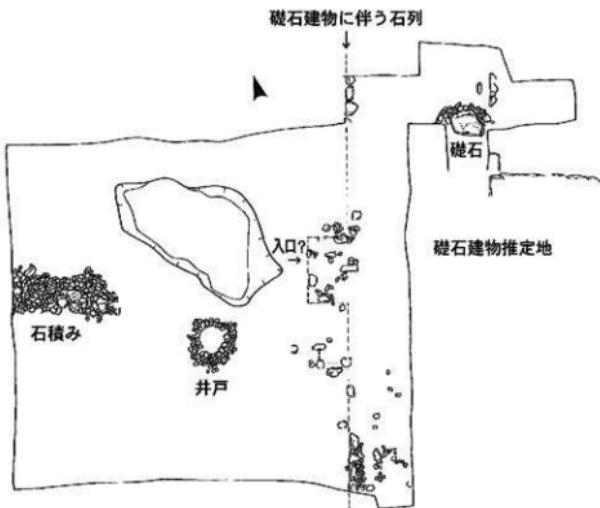
石列はその東の大型礎石の建物域を限るものと思われ、四角い張り出しはその入口部と想定できる。礎石建物推定地は現権台の下になり、現状での確認は不可能である。

この建物遺構の上を覆う整地層に掘り込まれた廃棄土坑からは、第3図1、2と同じ平瓦当、細

川氏の代え紋である「丸に二つ引き」紋の鬼瓦などが出土した。また、礎石のすわった層より下は中世の層であり、礎石は、黒田の時代かそれ以前にさかのぼるものである可能性が高い。また、調査区の西端から、東西方向の石積みが検出された（写真10、第6図）。花崗岩や川石が乱れて積み上げられているが、石垣状の施設の残骸と思われる。絵図には描かれていないもので時期はわからないが、石積みの下層は礎石建物と同じく低



写真10 椎ノ木門南調査区石積み（南→北）



第6図 椎ノ木門南調査区 (1/200)

したことから、黒田、細川の時代まで遡れる遺構と考えられる。また、この石積みのすわった層からは、井戸、建物遺構となると思われる柱穴等が検出されている。

まだ明確に遺構の時代は断定できないが、地下にこれだけの建物遺構が残存していることが確認できたのは、大きな成果である。本丸内は神社地であるから、荒らされた可能性が低く、中津城創建時の建物遺構が残存する期待が持たれる。

7.まとめ

昨年度の調査結果をふまえ、今年度は石垣の上(10区調査区)、断面(大鳥居西調査区)、裏(椎ノ木門南調査区)で確認調査を行った。その結果、築城当初の姿にせまる大きな成果を得ることができた。10区調査区や大鳥居西調査区では石垣の築造過程が最低4段階から5段階に及ぶものであることが確認できた。

まずⅠ期、天正期の築城当初の石垣は現在より約1.2m低く、天端幅は2.4mと狭いものだった。Ⅰ期、Ⅱ期の間隔は狭く、石垣事態の形態として大きな変化はない。Ⅲ期まで櫓台は造られていなかったようである。Ⅳ期、17世紀前半、おそらく細川氏により石垣は大きく様変わりする。堀石垣は1.2mかさ上げされ、城内側へ張り出して櫓台が築かれる。石垣の天端は幅6mと広くなる。Ⅳ期、さらに櫓台は城内側へ拡幅され、石垣は現在の形状に近づく。石垣の増築は全て城内側へと向けられており、堀の石垣は築城当初のまま、いじられてないことがわかった。これは、昨年度、堀石垣を根石まで掘削した結果、石積みの特徴から天正期の石垣が良好に残っているとの判断を立

証することになった。

石垣の増築過程が、断面でこれほど明確に追える例は貴重であり、埋め戻すのはしのびがたい。10区調査区の場合は、露出展示となると、石垣の構造上危険であることから断念した。しかし、人鳥居西調査区は、もともと断面を斜めに仕上げる予定であったことから、露出展示が可能であると判断し、現在保存の方向で検討している。位置的にも中津城への観光客が通る、メインの通路であり、将来中津城観光の日玉となるであろう。石垣修復工事は平成16年終了予定であるが、今後は城内で確認調査を計画的に行い、築城当初の中津城の姿にせまれればと思っている。

中津城は近世城郭としては九州最古にして、現存する唯一の城である。石垣修復工事に伴い調査のメスが入り、ここ二年間で、急速に中津城の姿が解明されてきた。中津城のこれほど大掛かりな調査を行える機会は千載一遇のチャンスであり、この調査結果は将来中津市の観光資源としても大いに役立つものとなろう。地下に埋没して人の目にふれにくい文化財ではなく、地上にそびえ市民の生活に密着してきた文化財を調査することの厳しさをひしひしと体感するこのごろであるが、市民への責任ということを常に意識しながら、今後の調査に邁進していきたいと意を決しているしたいである。

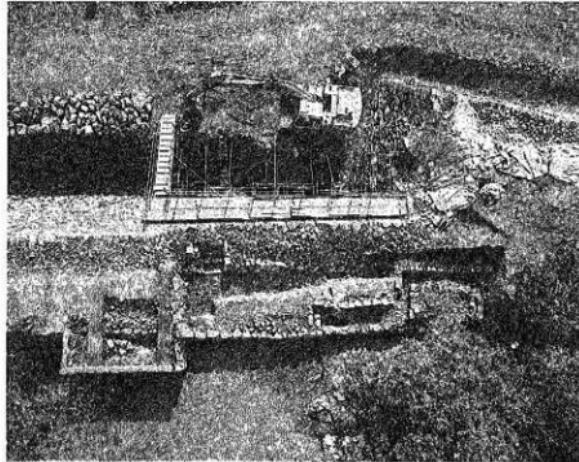
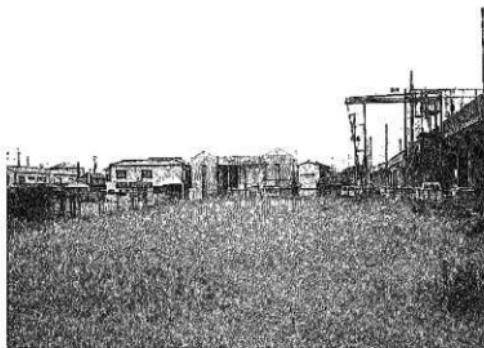
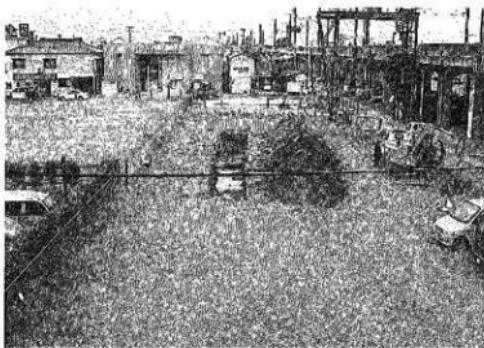


写真11 本丸南西石垣10区全景

図版1



沖代地区条里跡福成地区
試掘前風景

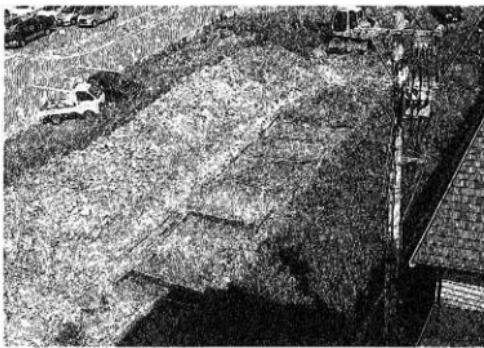


沖代地区条里跡福成地区
トレンチ状況

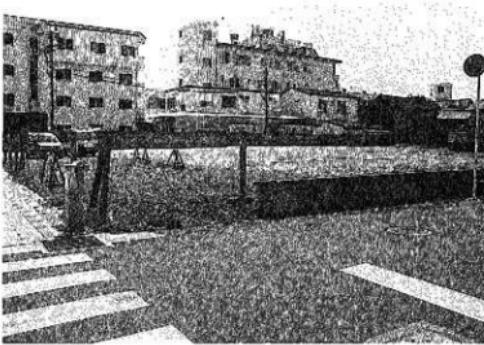


沖代地区条里跡龍田地区
試掘前風景

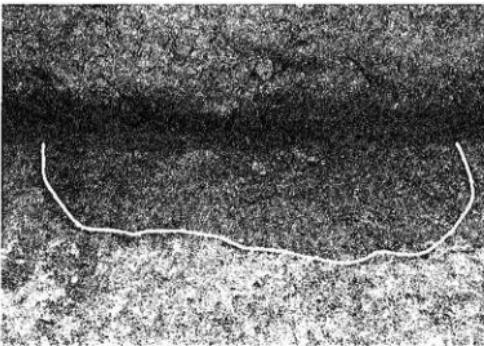
図版2



沖代地区条里跡龍田地区
トレンチ状況



中津城下町遺跡
殿町奥平孫次郎屋敷跡
試掘前風景



中津城下町遺跡
殿町奥平孫次郎屋敷跡
土壤

報告書抄録

書名		おきだいちくじよりあとふくなりちくたつたちく 沖代地区条里跡福成地区・龍田地区							
中津城下町遺跡		なかつじょうかまちいせきとのまちおくだいらまごじろうやしきあと 殿町奥平孫次郎屋敷跡							
中津城本丸南西石垣(II)		なかつじょうほんまるなんせいしわき 中津城本丸南西石垣(II)							
調査名		2002年度中津地区遺跡群発掘調査概報							
調査次		(XV)							
シリーズ名		中津市文化財報告							
シリーズ番号		第30集							
編集者名		高崎章子 花崎徹							
編集機関		中津市教育委員会							
所在地		大分県中津市豊田町14-3							
発行年月日		2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	削除コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因	
沖代地区条里跡 福成地区	大分県中津市 大字中殿466-6	44203	101007	33° 35' 45"	131° 11' 40"	20020502	853.2m ²	ビル建設	
沖代地区条里跡 龍田地区	大分県中津市 大字中殿288-1	44203	101007	33° 35' 30"	131° 11' 49"	20020808 20020827	860m ²	集合住宅建設	
中津城下町遺跡 殿町奥平孫次郎屋敷跡	大分県中津市 1422	44203	101002	33° 35' 58"	131° 11' 7"	20020904 20020911	2058m ²	病院建設	
中津城 本丸南西石垣	大分県中津市 1278-1	44203	101001	33° 36' 10"	131° 11' 16"	20021001 20030328	465m ²	保存整備	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
沖代地区条里跡 福成地区	なし	なし	なし	なし					
沖代地区条里跡 龍田地区	水田	中世?	水田	須恵器、瓦質土器					
中津城下町遺跡 殿町奥平孫次郎屋敷跡	城下町	江戸時代	土壙	陶磁器					
中津城 本丸南西石垣	近世城郭	江戸時代	石垣、建物跡	瓦、陶磁器 土器	石垣が築城時から何段階もへて拡張されていく様子が確認できた。				

沖代地区条里跡 福成・龍田地区
中津城下町遺跡 殿町奥平孫次郎屋敷跡
中津城本丸南西石垣 (II)

2002年度 中津地区遺跡群発掘調査概報
中津市文化財調査報告 第30集

2003年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 蒼川原田印刷社